

日本語の相対敬語法

吉 喜 漵

日 語 日 文 學 科

(1983. 9. 30 接受)

〈要 約〉

日本語と韓国語はいずれも敬語をもっているが、その用法は相違する。つまり日本語は相対的敬語であり、韓国語は絶対的敬語である。両国語は、特に in-group, out-group の関わり方で大きく食い違い、このような違いは、相手国の言語習得をより困難なものにしている。

そこで本稿では、日本語の相対的敬語法の歴史と実態、具体的語彙などについて調べ、韓国人学習者の注意すべき両国敬語法の違いについてもふれてみた。

日本語의 相對敬語法

吉 喜 漵

日 語 日 文 學 科

(1983. 9. 30 접수)

〈要 約〉

일본어와 한국어에는 모두 경어법이 있지만 그 용법이 서로 다르다. 즉, 일본어는 '상대적 경어'인데 반하여, 한국어는 '절대적 경어'이다. 그러나 여기에서 '상대' 또는 '절대'라는 것은 절대적인 상대, 절대가 아닌 유동성을 떤 것이다. 따라서, 이런 상이한 경어적 습성은 상대국의 언어를 습득함에 있어, 큰 장애요소가 되고 있으며, 이에 본고는 일본어의 상대적 경어법의 역사와 실태, 구체적 어휘, 용례 등에 대해 살펴보고, 한국인 학습자들이 주의해야 할 양국 경어법의 차이에 대해서도 고찰해 본다.

I. 序 論

韓国人と日本人はその文法的枠組が似ているためか、諸外国人に比べて比較的容易にお互いの言葉を習得するようであるが、それでも両国語の言葉づかいの中で最も間違いやすい誤りがあるとしたら、その一つは敬語法であるだろう。例えば、韓国人が身内(in-group)の上位者のことを外の人(out-group)に日本語で話す時、次のような敬語を用いるのをよく耳にする。

"わたくしのお父さんは会社に勤めておられます."

韓国語の敬語習慣にとらわれて、つい尊敬語を用

いた表現で、どうも聞き苦しい日本語になってしまったのである。

そして、これと対照的に、韓国に住む日本人からは、

"自分の親のことを話すのに敬語形を使わなければならない"というので、何となくそぐわない思いに耐えながら敬語形を使ったことが多い。"

ということを聞かされる。これらは一般的によく言われているように日本語の敬語は「相対敬語」で、韓国語の敬語は「絶対敬語」であるという違いから生じる現象である。

しかし、一口に相対敬語といっても、日本語における敬語の相対性とは、上下関係、親疎関係、話題の種類、コミュニケーション上の機能、話される状

況など、いろいろな面を考慮に入れた上で、その場その場で使い分けなければならない。きわめて複雑なもので、日本人ですらも、自分はうまく敬語が使えないという人が多い実状である。

そこで本稿では、このきわめて複雑な日本語敬語について、その起源、基準、一般的の意識、具体的表現方法などを考察し、韓国人の学習者が誤りをおこしやすい、日本語敬語の相対性に特に重点をおいてまとめてみることにする。

II. 敬語の起源と發達

敬語の歴史を考えるに当たって、まず最初に取り上げなければならないものが、その起源の問題である。しかし、この問題についての研究は、今はまだ臆測の域を出でていないようだ。

金田一京助氏は敬語の起源を古代人の言語のタブーと神への褒めことばに求めた。⁽¹⁾ 語源的に、敬語の多くが婉曲表現または讚えの表現から出ていることを考えると、基本的にこの考え方には肯けるものがある。おそらく古代人は人智人力を越える大自然の諸現象や大自然そのもの、また人々の恐怖の対象である動物などを神として崇め、怖れの気持からは直叙を避けて間接的表現をとり、神の恩恵を願っては贊美の表現をとったものと思われる。上代の敬語に神への使用が多いのは、こうした敬語の発生と結びつけて考えられるかも知れない。ただ、個々の語がどのようにして敬語になって行ったかについては、ほとんどの言葉に定説といったものがないようであり。したがってここでは取り上げないことにする。

しかし、上のように敬語が相手(神、自然、人間)との社会的または心理的距離を調節する言語的手段であると考えると、古代の敬語法といいうものは、当時の封建的な社会構造から生じる上下の人間関係と深い関わりをもつものであったということが自ずからはっきりしてくる。古代敬語は、社会的・階層的序列関係への配慮が敬語表現の仕方に大きく影響を及ぼす、つまり公私・上下の間での必然感にもとづく敬語であった。敬語使用の対象となる人物の身分・家柄・地位などといった社会的序列構成に関しての

条件について、その上下関係に対する話し手の配慮が敬意の度合いを決めたり、または敬語を用いるか用いないかを決めたりする基準として強く作用したことである。そして厳しい身分制度の下においての上下関係の配慮は、敬語を固定化の方向に導いた。人称・場面のいかんを問わず、その人物に対する敬語使用は固定化されて行く、いわば絶対的敬語の性格を帯びていたのであった。

では、上のように客観的な上位、下位関係あるいは階層的上位、下位規定を必然感をもって言語表現にのぼせていた古代敬語は、いつ頃からその場その場での相対的上下関係、特に場面的な恩恵の受給関係、あるいは相互的な社交関係を必要感をもって言語表現にあらわす相対的な近代敬語に変わって行ったのだろうか。

その正確な移行時期は事の性質上、判然しないが(例えば鎌倉時代にすでに相対的敬語使用の一面がうかがえる反面、江戸時代には強固な序列敬語が見られる)、ただ、近代敬語の特徴といわれる相対敬語的意識の発生はすでにその端緒を平安時代に見出すことができる。“使用人が自らの主人のことを他人の前で話すとき 尊敬語を用いるのは聞き苦しい。”とする清少納言の批評⁽²⁾『枕草子』ふみことばなめき人こそいとにくけれ)は、場面・聞き手を意識しての、いわゆる相対敬語的意識と読みとれそうだ。なお、鎌倉・室町時代における文献上のそのような反映が読みとれる例は見出し難いが、ただ人間関係の複雑さを増していく室町時代の末から江戸時代にかけての相対敬語の傾斜が著しく増していったらしいことは言えそうだ。⁽³⁾ そして、この敬語の相対性は近代にくるにつれてますますその色合を濃くして行き、近代、特に現代敬語は、“あなたとわたしの間での必要感にもとづく敬語”⁽⁴⁾になってきているのである。

近代敬語の特徴は、場面や相手(敬語使用の対象や聞き手)との関係などへの話し手の配慮が敬語表現の選択の仕方に大きく影響することである。恩恵、利害、親疎あるいは社交上の必要など、いわば話し手側の意識が優先する。話し手は、当然敬語を用いるべき人物(例えば息子と父親、部下と社長)に対しても聞き手のいかんによって、つまり相手が身内か否

(1) 國語學會、「國語學大辭典」, p. 255, 東京堂出版, 1981.

(2) 清少納言, 『枕草子』, p. 108, 角川文庫, 1975.

(3) 外山映山, 「敬語の變遷」, 『岩波講座 日本語 4. 敬語』, p. 146, 岩波書店, 1977.

(4) 宮地裕, 「日本語と日本語教育」, 「待遇表現」, p. 118, 國立國語研究所, 1982.

かによって 敬語を用いたり用いなかったりするのである。現代日本語の敬語の難しさもここにある。この日本語敬語についての基準、具體的用法は、のちの章で詳しく取り上げることにする。

では、次に現代日本における一般の人々の敬語意識と、それについての実態調査結果をまとめてみることにする。

III. 現在の敬語意識の實態

『待遇表現』では西洋人と日本人を比べながら、日本人の敬語意識について次のように述べる。

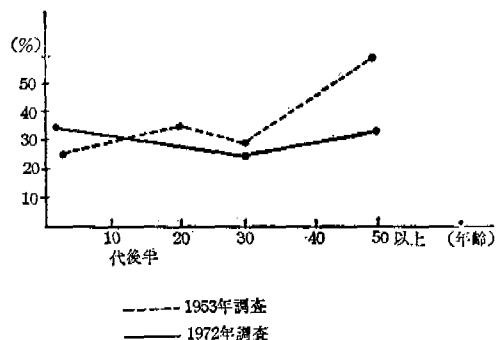
西洋人の場合、個人自体が集団の中にはあって確固とした個の領域を占めている。つまり個人の自由というものを守り、それぞれに独立している。これに対し日本人の場合は、個人というものが、個人の属する集団の中でのあり方に重点がおいて考えられる。互いに依存して集団の和を保つこと、事なくやっていくことにのみ神経が使われる。西洋人は‘個’の領域を守りながら他の人たちとうまくやっていく方法を深すのに比べ、日本人は自分の主張よりも人の気持を考え、時にはあきらめ的な気持から集団の目標達成のために‘個’を殺す。⁽⁵⁾

一方、劍持武彦氏は彼の著書、『間の日本文化』で、

「日本人は、ちょうど石垣をつくるのに石と石と組み合わせ、そのあいだに「間」をつくっておいて、地震の場合でもけっして崩れない石垣を工夫したように、意識の世界でも「間」を大切にした。人と人のあいだの身分の上下、親疎の関係を明確に示す敬語という語法は、いわば人間関係における間のとり方と考えることができる。」⁽⁶⁾

というふうに日本語の敬語法を説明している。では、このような日本語の敬語はじっさい一般の人々の間でどのように受けとめられ、使われているのだろうか。

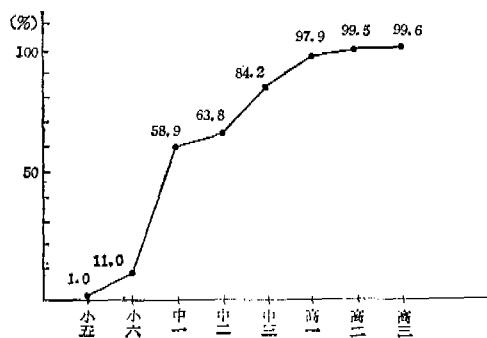
国立国語研究所では、1972年11月に愛知県岡崎市民を対象に敬語の調査を行っている。これは約20年前の1953年9月に同研究所が岡崎で行った調査と比較し、そこから地域社会全体の20年間の変化の状況を明らかにすることを目的とした継続調査の一つであった。下の図1は、「あなたは口上の人と話をすると、うまく敬語が使えますか」という質問に対して、「うまく使えない」と答えた人だけの割合を年令別に示したものである。



〈図1〉 敬語がうまく使えない人

2回の調査を通じて言えることは、「自分はうまく敬語が使えない」と思っている者は30才代で最も少なく、この年代から離れるにつれて増えていることがある。30才代が一番多く敬語がうまく使えると思っている理由として、この年代は全般的に社会活動のもっとも著しい年代であり、なおかつ地位的にも中堅的な立場にあり、普段から上役や年長者、また部下や年少者に対して、というように相手にとってことばを使い分ける機会が多いためだと分析している。⁽⁷⁾

いっぽう、よその人に自分の母親のことを言うのに「お母さん」と言わずに「母」と言うようになるのはいつごろだろうか。図2は東京の山の手の女子生徒についてのものだが、東京下町や静岡市でもほぼ同様の結果が得られたそうである。



〈図2〉 母というようになる時期

(5) 文化廳、『待遇表現』、p. 27、大蔵省印刷局、1980。

(6) 劍持武彦、『「間」の日本文化』、p. 60、講談社、1982。

(7) 江川清、『ことばの社会調査』、『統計』2-12、1975年。

この調査によると、小学校から中学校、中学校から高等学校へ移る時期に、「母」の比率が急激に高まることがわかる。

「母」と言うべきだとする注意は、約半数は先生から受け、ついで母、友だちから受けている。そして直接母親によびかけるには、地域、学年を通じて「おかあさん」が一番多かったが、それ以下の順位は、山の手の高校で、「おかあさき>おかあちゃん>おかあちゃん>ママ」、下町の高校では、「おかあちゃん>おかあさま>かあちゃん>かあさん」だったそうである。⁽⁸⁾

また、共通語では話し手は身内の者には敬語を用いないのが一般的であるとされるが(だから、先生が訪ねて来た場合に学生が上級生のことを話題にしても、その上級生に敬語をつけないのが一般とされる)国立国語研究所で1970年、尊敬している先生があなたの上級生(先輩)を訪ねて来た場合

ただいま外出中ですが、まもなく帰るからどうぞ待ってほしい。

と言う時、という設定で答えを求めたら、質問して得られた表現形式のうち、傍線部の形式を、「帰ります」「帰る」などの言い方をすると答えた人が、東京で58%を占めた。一方、「帰られます」など、敬語形式を用いると答えた人も東京に34%あったが、これは大阪で敬語形を用いると答えた42%の数値より少なく、先輩に敬語形式を用いることは東京より大阪の方にやや多いことが認められた。⁽⁹⁾

そして、これと似たような性質の調査だが、今度は会社内で一般社員が社長に部長のことを話すとき、という設定だ。社長に、「部長は今、席にいるのか」と聞かれたとき、「はい、いらっしゃいます」がよいと思う人はⒶ、「はい、おります」がよいと思う人はⒷとし、ⒶⒷのうちに答えを求めた。そして役付社員には、一般社員として最も良いと思うものをⒶⒷのうちに選ばせた。その結果は次の通りである。

〈表1〉 絶対・相対敬語の選好度

| | 一 般 | 役 付 | 一 般 男 | 一 般 女 | 全 体 |
|------|------|------|-------|-------|------|
| (%) | | | | | |
| Ⓐがよい | 33.9 | 52.5 | 31.1 | 39.4 | 39.8 |
| Ⓑがよい | 62.0 | 45.0 | 65.0 | 57.6 | 56.8 |

(8) 柴田武,『社会言語学の課題』,三省堂,1978.

(9) 林木,『圖説日本語』,p.416,角川書店,1982.

(10) 山中章夫,『敬語論議はなぜ起る』,『言語生活』213號,1969年.

「おります」と答えることに対して、男性より女性の方が、一般社員より役付社員の方が抵抗があるということが示されている。社長に部長のことを話すのに「いらっしゃいます」と答えた方がいいと思う者が(もちろん敬語法ではまちがい)役付社員の52.5%女性社員の40%近くもあるのである。

また、よその人の前で自分の上役について話すとき、「佐藤は東京に行っています」のように敬語ぬきで言うこと、つまり自分の上役を、「佐藤が」のように呼びすぎてすることに対する年令別、職種別、学年別反応をみると、高年令層、低学年層、農林漁業、サービス業、商業の人たちが抵抗感を感じており、逆に低年令層、高学年層、事務のサラリーマンなどは「当然」とする方に傾いていることも調査の結果が示している。⁽¹⁰⁾

以上の調査結果をまとめてみると、現在、日本人の中には自分は敬語がうまく使えないと思う人も相当の数に達しているが、その中では30歳代が一番少ない。そして自分の母親のことを「母」と人に言えるようになるのは、地域に関係なく上級学校に進む時にその傾向が著しい。身内のものに対しては、その人がいかに自分より身分が高くとも、よその人の、あるいはその人より身分の高い人の前で表現する時は尊敬語を用いないという敬語法に対しては、大阪よりは東京の方でよく理解されており、女子よりは男子社員に、役付社員よりは一般社員に、それから高年令、低学年、商業の人たちよりは低年令、高学年、事務のサラリーマンの人たちがより抵抗感なく受けとめているようである。

Ⅳ. 日本語敬語の相対敬語法

1. 日本語敬語の基準

では、この複雑な日本語敬語について、その相対性について何か基準というようなものはないだろうか。そこで挙げられるのが1952年5月、日本文部省調査普及局国語課の原敏夫課長の名で公表された国語審議会の、『これからの敬語』である。この小冊子は、日常の言語生活におけるもっとも身近な問題をとりあげて、これからはこうである方が望ましいと思わ

れる形をまとめたものである。ここでは、その一部を紹介することにする。

“これから敬語についての問題は単なることばの上だけでの問題ではなく、実生活における作法と一体をなすものであるから、これから敬語は、これから新しい時代に即した新しい作法の成長とともに平明・簡素な新しい敬語法として健全な発達をとげることを望む次第である。

〈基本方針〉

一、これまでの敬語は、旧時代に発達したままで、必要以上にはん雑な点があった。これからの敬語は、その行き過ぎをいましめ、誤用を正し、できるだけ平明・簡素にありたいものである。

二、これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならぬ。

三、女性のことばでは、必要以上に敬語または美称が多く使われている(たとえば「お」の付け過ぎなど)。この点、女性の反省・自覚によって次第に純化されることが望ましい。

四、奉仕の精神を取り違えて、不当に高い尊敬語や、不当に低い謙そん語を使うことが特に商業方面などに多かった。そういうことによって、知らずしらず自他の人格的等級を見失うことがあるのは、はなはだいましむべきことである。⁽¹¹⁾

2. 日本語敬語の相対敬語法

相対敬語法でまず見定めなければならないのは“身内”(in-group)の概念である。身内に関するものには尊敬語を使わず、必要なときは謙譲語を使うのが常識となっている。身内といっても自分の家族、親類だけがここでいう身内なのではない。他社に対して自分の会社なら会社も身内になる。

敬語はまた、単に敬意の表明だけでなく、親しみの薄さ、へだたりの表明でもある。ときには敵意の表明としての皮肉やあてこすりにもなる。だから、いつも身内か外かの概念にだけとらわれていては、かえって変な場合も多い。これは敬語を使う時、その環境も考慮に入れ、場面場面に応じて対応の仕方を変える必要性を物語る。

いっぽう、南不二男氏は日本語敬語を力(上下関係)と連帶(親疎関係)の原理で説く。“目上の人には「父は公務員です」と言わなければならない”というような年令の上下、職場などの地位の上下関係での敬

語使用には「力」関係が作用しており、親しい同僚との間での敬語抜きで話をするとか、あるいは外部の人との話の中で自分と同じ会社の上役のことをいう場合に敬語をつけないことなどには“連帶”的原理が働いているのである。しかし、彼も日本語敬語には上の二つの原理(人と人との間の社会的問題に関するもの)だけで説明しきれない部分がたくさんあるので問題の言語表現がどんな議題のものか、コミュニケーション上、どのような機能をもつか(たとえばあいさつのような人と人との間の社会的接触を目的とするものなど)、どんな状況のもとで話されるものか(あらたまつた場面か、くだけた場面かなど)などを考慮する必要があり、それに加えて、それぞれの社会における言葉の外の事情も考えなければならないといふ。⁽¹²⁾

だから日本語において敬語を使う時は、とりあえず相手が身内(in-group)か否か(out-group)をはっきりわきまえた上で尊敬語を用いるかまたは謙譲語を用いるかを決めるべきである。それでは、ここで親族関係の呼び方と尊敬語と謙譲語の用いられ方にについて調べてみよう。

① 親族関係の呼び方

敬語法において、家庭とは敬語の原型を成す基本単位である。夫婦、親子を中心として形成される家庭は、時代をとわず、男女・年令差など様々の要素を含むためだ。しかし、その原型的な単位である点が災いしてか、家族と敬語の問題は見逃されがちになるようだが、家族と敬語ということで第一に問題になるのは家族の呼び方であろう。日本語の相対的な敬語は動詞ばかりでなく親族関係の呼称においても、家族内で話す時と家族外の人に向かって話す時の区別がはっきりしている。

では、現代の標準的な家族間においての呼び方を整理してみる。

〈表2〉の★印のあるところは家族内で使うものと同じでよい。丁寧な話し方をする家では「…さん」のかわり「…さま」を使い、子供のある家では呼び方が子ども中心となり、父親は自分をさして「おとうさん」と言ったり、妻に向かって「おかあさん」を使うこともある。「ちゃん」は、親しみを表すので、幼い子どもを呼ぶときには「名まえ+ちゃん」といい、また、「に

(11) 伊藤義ほか、『新手紙事典』、p.703、講談社、1973。

(12) 金田一春彦編、『日本語の姿』、pp.175~180、大修館書店、1981。

〈表 2〉 親族関係のよび方

| 場 相手 | 直接呼びかけるとき | 家族内で話すとき | 家族外の人に向かって話すとき | 他人の家族について話すとき |
|---------|-----------|------------|-----------------------|--|
| 夫 | 〔名まえ〕 | 〔名まえや(さん)〕 | 主人、たく(姓) | ご主人(姓さん) |
| 妻 | 〔名まえ〕 | 〔名まえ〕 | 家内(かない) | おくさん |
| 父 | おとうさん | おとうさん | ちち | × |
| 母 | おかあさん | おかあさん | はは | × |
| 兄 | (お)にいさん | (お)にいさん | あに | × |
| 姉 | (お)ねえさん | (お)ねえさん | あね | × |
| 弟 | 〔名まえ〕 | 〔名まえ〕 | おとうと | おとうとさん |
| 妹 | 〔名まえ〕 | 〔名まえ〕 | いもうと | いもうとさん |
| 子ども | 〔名まえ〕 | 〔名まえ〕 | (男)むすこ(うちの) (女)むすめ | (男)ばっちゃん、 むすこさん (女)おじょうさん むすめさん |
| 祖父 | おじいさん | おじいさん | そふ | × |
| 祖母 | おばあさん | おばあさん | そぼ | × |
| 孫 | 〔名まえ〕 | 〔名まえ〕 | (うちの)まご | おまごさん |
| おじ | おじさん | おじさん | おじ | × |
| おば | おばさん | おばさん | おば | × |

いさん」のかわりに「にいちゃん」などが使われる。そして都会の子どもたちの間では、「おとうさん」「おかあさん」のかわりに「パパ」「ママ」が使われることが多く、本当の兄や姉でなくとも、自分より年上のいとこなどに対して「にいさん」「ねえさん」を使う。いっぽう、他人の家族について話すときは、「田中さん」のおくさんとか、「山中さん」のむすこさんとかのように、姓をいっしょに使うことが多く、家のなかでも、使用人に向かっていいうときは、夫を「だんなさま」妻を「おくさん」という。

つまり、日本語において、家族外の人に向かって自身または自分の家族のことを話すときは必ずへりくだった呼称を使うのであり、これは、in-groupの中での上下関係がout-groupとの関係より重要視される韓国語との相異点の一つである。

② 尊敬語と謙譲語

話し手が、話し手自身またはin-groupの人をout-groupの人には話をとき、対等の関係にある人に言うときの言い方よりへりくだつていう謙譲語を用いなければならない。このような謙譲語は、他のどの言語よりも日本語に著しく見られる特色で、例えば女王がしゃべった、言ったという動作、行為を表すのに、英語にもいくつかの上品な敬意を表す言い方は

あるけれど‘say’という語は用いなくてはならない。‘eat’も同様である。しかし、日本語では、時に‘食う’をいい、時に‘食べる’といい、時に‘めし上がる’‘あがる’といい、時に‘いただく’と言う。これは、日本語敬語が必ずしも文法の問題でない、語彙の問題でもあることを示す。⁽¹³⁾

それでは、敬語の語彙の中で一番よく使われている尊敬語と謙譲語をまとめてみる。

〈表 3〉 接頭語・接尾語

| 尊 敬 語 | 謙 譲 語 |
|-----------|------------|
| お～(お考え) | 〈相手に対する〉 |
| おん～(おんれ) | お～(お返事) |
| ご～(ご住所) | 相～(相消みません) |
| ぎょ～(ぎょ物) | 相成ります |
| み～(み仏) | |
| おみ～(おみくじ) | |
| 貴～(貴社) | 粗～(粗品) |
| 芳～(芳名) | 拙～(拙宅) |
| 令～(令兄) | 小～(小若) |
| 大～(大兄) | 弊～(弊社) |
| 尊～(尊父) | 愚～(愚妻) |
| 玉～(正稿) | |

(13) 林巨樹、「日本の言の葉」, p.36, 東京書籍, 1979.

| | 尊 敬 語 | 謙 慶 語 |
|----------------|---|---|
| 下につける形(接尾辭その他) | ～さま(川上様) ～さん(川上さん) ～くん(川上君) ～うえ(父上) ～氏(川上氏) ～殿(川上殿) ～ご(母御) ～がた(先生がた) | ～ども(私ども) ～め(くうちの) ～せがれめ ～儀(三郎儀) |
| | ～れる ～られる ～てくださる (見てくださる) | ～ていただく (教えていただく) ～させていただく (休ませていただく) |
| | ～てごらん (見てごらん) | |
| | おーさま (おどうさま) | お～申す (お連れ申す) |
| | おーさん (お医者さん) | お～申しあげる (お通り申しあげる) |
| | おんーうえ(御母上) | ご～申しあげる (ご報告申しあげる) |
| | おんーうえさま (御母上様) | |
| | ごーさん (ご隠居さん) | |
| | おー御さま (お妹御さま) | |
| | ごーさま (御両親様) | |
| 上と下につけれる形 | おーになる (お歸りになる) | お～する (お呼びする) |
| | ごーになる (ご心配になる) | ご～する (ご紹介する) |
| | おーなさる (お書きなさる) | お～いたす (お見せいたします) |
| | ごーなさる (ご覧なさる) | ご～いたす (ご案内いたします) |
| | おーあそばす (お書きあそばす) | |
| | ごーあそばす (ご出附あそばす) | |
| | おくださる (お教えくださる) | お～いただく (おほめいただく) |
| | ごーくださる (ご報告くださる) | ご～いただく (ご覧いただく) |
| 形 | おーです (およびです) | お～ねがう (お伝え願う) |
| | ごーです (ご上京です) | ご～ねがう (ご覧願う) |

以上尊敬、謙讓を表すために特定の語を用いるものを動詞を主としてまとめてみた。

〈表3〉のほかに、文末に用いる形式、「…だ」、「…である」などがあるが、相手または話題の人に高い敬意を示す場合には「…でいらっしゃる」になり、丁寧な言い方では「…です / …でございます / …であります」になる。⁽¹⁴⁾

これで、敬語を使う上での語彙上の問題を一応まとめてみたわけだが、日本語敬語が韓国人学習にとりわけ難しいとされる理由は、この語彙選択に先立って、その場その場に合った、すなわち上下関係を始めとする親疎関係、話題の種類、話される状況などを考慮した上で下される状況判断の難しさのためである。この状況判断は、現代社会が多様化し、対人関係もずっと複雑化するにつれ、日本文化の中に住む、日本人にすら難しい問題として浮かび上がってきている。日本語敬語学習におけるキーポイントといえるこの状況判断について、その主な原則をいくつかの例をあげながら説明することにする。

③ 具体的用法

out-groupの人と話すときは、こちらがへりくだる。

もし、「部長さん、いらっしゃいますか」と社外の人に聞かれ、「はい、部長さんはただいまお出かけになつていらっしゃいます」と答えたら、日本では、その人はビジネスマンとしての常識を疑われることだろう。日本の社会では、一つの会社で働く人間は、社長以下全員、身内と考え、社外の人に社内者のこと話をときは、敬語を使わないのがルールである(原則1)。つまり、

「部長はただいま外出しております」

となり、姓を呼ぶときは、たとえ自分の上司、社長であっても、社外の人には、「山田」「川上」というように呼びすぎてにしなくてはならない。この原則は、話題の人物が同僚しているときも同じである。例えば、得意先の部長に自社の社長を紹介するとき、

「部長さん、私たちの社長の小島でございます。社長、こちらは私がいつもお世話になっている竹田部長さんです。」

の順序になる。この順序を間違えるといけない。引き合わせるときにもへりくだって、

「部長さん、今日は私たちの社長(の小島)ともども

(14) 文化題、〈前掲書〉、pp. 41~47.

〈表4〉 主要敬語一覧表

| 普通語 | 敬 | | 語 |
|----------------|--|--|--------------|
| | 尊敬語 | 謙譏語 | その他 |
| い る | いらっしゃる おいでになる | おる | 〈あります〉 |
| あ る | | | 〈ございます〉 |
| す る | なさる あそばす | いたす | 〈いたします〉 |
| い く | いらっしゃる おいでになる みえる、おみえになる お越しになる | 参る | 〈(～して)まいります〉 |
| 言 う | おっしゃる 仰せ付ける のたまう | 申し上げる 申す | 〈申します〉 |
| 会 う | | お目にかかる お目もじする | |
| 見 る | ご覧になる 〈なさる／くださる〉 | 拝見する | |
| 見 せ る | | お目にかける ご覧にいれる | |
| 与 え る (や る) | くださる 賜わる | さしあげる あげる 進呈する／進上する 献上する | 〈(～て)あげます〉 |
| も ら う | | いただく 賜わる ちょうだいする 拝受する あずかる | |
| 思 う | おぼしめす | 存する | |
| 知 る (知っている) | | 存じ上げる 存する、存じる (存じておる) | 〈存じます〉 |
| 食 べ る の む | めしあがる あがる | ちょうだいする いただく | 〈いただきます〉 |
| 聞 く | | うかがう 承る 拝聴する | |
| 聞かせる | | お耳に入れる | |

| 普通語 | 敬語 | | |
|---------------|----------|--------------------|----------|
| | 尊敬語 | 謙譲語 | その他 |
| き(訊)く 質問する | | うかがう 承る | |
| たずねる | | うかがう、おうかがい する | |
| 訪問する | | あがる、參上する おじゃまする | |
| 着る | 召す | | |
| 借りる | | 拝借する | |
| 寝る | お休みになる | | やすむ |
| 死ぬ | おかげになる | | なくなる |
| 買う | | | 求める |
| 持っていく(くる) | | 持参する | |
| 引き受けた | | かしこまりました | 〈承知しました〉 |
| 気に入る | お気に召す | | |
| (かせを)ひく | (おかげを)召す | | |
| (年を)とる | (お年を)召す | | |
| 金を貸す | | ご用立てする | |

まいりました。」

である。また、社長が来られなくなった場合にも、「実は、社長もまいってごあいさつ申し上げるつもりでおりましたが……」

のように謙譲語を使わなければならない。このようなとき注意することは、「社長もまいって親しくあいさつ申し上げる…」とか、「社長もみずからまいって…」のように、「特に…」というニュアンスの言葉を加え、恩恵を当えるような感じを与えないことである。これは、ともすれば尊大と取られるからである。また反対に、他社の人を迎えて戻ったとき、

「社長、近藤商事の竹田部長をお連れしてまいりました。」

では、竹田氏は連行されてきたような言い方である。単に、

「竹田部長がお見えになりました」と言えば良い。

この上役の姓を呼びすべてにするのを女性の場合にもそのまま当てはめるのかといったら現実的には多分の抵抗感があるようだが、敬語法としては、それ

が正しいと言える。割り切って言うことが肝心なのである。

さらに、家族、身内のこと第三者に言うときにも、「父」「母」「主人」「家内」「息子」「娘」などのように卑称を使うのが常識である(原則2)。「あなたのお父さんのご職業は?」と聞かれたのに対して、それにつられて「お父さんは、学校の教師で…」では、いけないのである。そして、ここで教師と言わず先生というのも、先生という語は別に敬意を含んで使われることがあるのでよくない。

「家内が奥様を存じ上げていると申しております。」

「兄が先生のご本を何冊か読ませていただいていると申しております。」

などのように卑称を使うことが望ましいとされるが、だからといって、「愚妻」「豚児」とまで言う必要はなく、また友人、同僚、知人などだけでもの言える相手には、卑称にこだわる必要はないだろう。

次に身内どうしの対話で、敬語の使い方で迷うこ

との多いケースの一つは、自分の上級の人のことをさらに高い地位の人に話す場合である。例えば、社長から「部長はいるかね」とたずねられた時、あるいは部長から「私の考えを社長に話してくれ」と頼まれたとき、どう答え、どう言えばいいのかという問題である。敬語の原則から言えば、社長は部長より身分が高いから、部長のことをへりくだらせて、「いらっしゃいます」でない「おります」、「おっしゃるには…」でない「申しますには…」でなければならないが、これもまた、現実的には、いろいろと抵抗感(統計によれば、高年令層、低学年、女性)が強いらしく、実際、現代コミュニケーション・センターで出している、『日本語のルール・ブック』などでは、「いらっしゃいます」「おっしゃるには…」を勧めている実状である。このような実状は、日本語の相対敬語の特性に、絶対的な特性が加わり、日本語の相対性が搖れつつあるということを示すものと考え、後に若干ふれてみることにする。

ではまた話を戻して、広い意味での身内(例えば会社)と狭い意味での身内(例えば家族)との会話はどうあるべきだろうか。よその会社の人に対して同じ社内の人間は身内と考えられるが、自分の会社の者の家族や近親者となると、会社の人間が外側の立場になる。したがってここで内側としての言葉をつかっては失礼にあたり、上役の家族、部下の家族をとわす、敬語を用いなければならない(原則3)。対面した場合でも、部下や後輩の親には、

「川島君には いろいろとがんばっていただいております。」

「川上さんがいらっしゃるので、私ども男性は安心して外を飛び回ることができきます。」

など、言葉づかいに注意が必要になる。

なお、姉妹会社の祝賀会では、どういう言葉を使うべきか。ここで新たに問題とされるのが敬語のもう一つの意味である。敬語は、敬意のあらわれだが、敬意といふものは、自分と相手との間に一線を引くということだ。これは、他の言葉で言えば、相手と距離をおくことである。だから、親しい姉妹会社の祝賀会で、一方の会社の社長(または社長代理)があまり謙譲語を使うのはかえって変で、親しみが薄くなるかもしれない。

また、out-groupの人と、相手側のことを話すとき、相手側の上級の人が話題になる場合はもちろん、

目下の人が話題になるときも、敬語を用いなければならない(原則4)。例えば

「御子息が今度、結婚なさるそうですね」

「お嬢さんはピアノがお上手ですね」

などの言い方がある。

以上、日本語の相対的敬語用法について考えてきた。ではここで日本語と韓国語の敬語についてみてみよう。

④ 韓日兩國語の敬語

韓国語には、日本で行われるのに類似した敬語法があり、それは複雑な体系でもって韓国語全体にまたがっている。敬語法には、相手を敬う尊敬語、自分をへり下す謙譲語、また相手を敬うのでも、自分をへり下すのでもない、単に上品、丁寧なことばの丁寧語などが含まれ、これらが助詞、語彙、動詞につく接辞、語尾などであらわされるところまで日本語と類似している。

例) ① 尊 敬 語

J : おじがごはんを食べます。
おじさんがごはんをめしあがります。

K : 아저씨가 밥을 먹습니다。
아저씨께서 진저를 드십니다。

② 謙 譲 語

J : 先生に言います。
先生に申しあげます。

K : 선생님에게 말합니다。
선생님께 말씀드립니다。

J : 社員に会います。
↓
社員にお目にかかります。

K : 사장을 만나니다。
↓
사장님을 뵈습니다。

③ 丁 寧 語

J : 死にました→なくなりました
K : 죽었습니다→돌아가셨습니다

J : めし→ごはん／なまえ→おなまえ
K : 밥→진지／이름→성함

上記を見る限りでは、韓日兩國の敬語体系は完全に合致するかのような印象を与える。確かに個々の文法要素については、かなりのところまで一致すると言えよう。

しかし、日本語敬語が相対敬語であるのに反し、韓国敬語は絶対敬語といわれる。ここでいう絶対敬語とは、話者である自分は、自分より上級の身内の

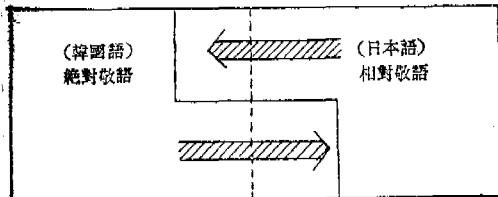
人(年令の上下、または身分の上下からみた)と話すとき敬語を使うのはもちろんのこと、その人(A)のことに関してよその人と話すときも尊敬語がそのまま用いられる敬語法である。そのよその人と身分の自上の人との上下関係は自分の言葉使いに全く影響を及ぼすことができなく、自分は、場所と相手に関係なく、自分の自上の人に対してはいつも敬語を使えば良いのである。したがって、よその人に自分の父親が家にいるということを告げる時も、

「아버지 은 집에 계십니다」(お父様は家におられます)になる。敬語を用いるべき人物(たとえば息子においての父、一般社員においての社長など)には、場所と相手に関係なく敬語を用いるのが韓国語の絶対敬語法だといえるのである。これは、相手と場合によって、そして、その場にあわせて言葉をより選ばなければならない相対敬語と大きく違う敬語法なのである。

しかし、先の日本の敬語意識実態調査にも現れたように、日本語の相対性に抵抗感を感じる人が多く、また、一部では、場合によっては絶対敬語を使うべきだとの声もある(先の会社内での一般社員が部長のことを社長に話すともなど)。

いっぽう、韓国語敬語では、その絶対性に相対性が加わりつつあるが、例えば、嫁が夫のことを姑に話す時は敬語を使うべきではないという主張が多いことを挙げられる。

この現象を図で示すと次のようになるだろう



〈図 3〉 両国敬語の搖れ

すなわち、絶対敬語である韓国語には相対性が加わりつつあり、相対敬語である日本語にも、絶対性がよみがえりつつある。言いかえれば、両国語の特色である絶対性、相対性はそれぞれ揺れつつある、ということである。この問題は今後の両国語の変化を見守る中で興味深い一面であるといえるだろう。

V. 結論

日本の敬語は相対的敬語と言われている。それは

自分の自上の家族で、当然敬語を使うべき相手であっても、家族外の人に向かって話すときは呼称をも含めて謙譲語を使わなければならないということである。この決まりは、ひとり家族関係にだけとどまるものではなく、一般の社会生活の中にも in-group と out-group の関係が形成されるなど、日本社会全体に及ぶものである。

歴史的な面から見て、日本でのこのような相対的な敬語意識の発生は平安時代からうかがわれる。相対的な敬語を使うようになった原因としては、「集団の和を保つことに神経を使った」のではなかろうかと推測している。そしてその敬語の相対性は近代にくるにつれてますますその色合を濃くして来たが、日本人さえ相対的な敬語法を含めての敬語の使い方はとまどっているようである。「あなたは自上の人と話をすると、うまく敬語が使えますか」という質問に、年令をとわず半分近くが「うまく使えない」と答えたのを見ると、なかなか日本の敬語法はむずかしいものと言えそうだ。まして絶対敬語習慣にひたっている韓国人學習者にとっては言うまでもないだろう。話し手は聞き手のいかんによって、つまり in-group か out-group かによって敬語を用いたり用いなかったりするから、自分の自上の人のことなら相手かまわず尊敬語を使う韓国語の敬語とはかなりのひらきがある。

いっぽう、ここでいう「相対的」「絶対的」というのは、絶対的な「絶対」「相対」ではなく、その性向の強い、相対的な「絶対」「相対」と理解すればよい。現に日本語は「相対的」面から「絶対的」面へと移行しつつあるし(敬語意識の揺れ、または相対敬語への抵抗が相当強い)、また、韓国語はだんだん「絶対的」な面から「相対的」な面をおびつつあるからである。

しかし、韓国人學習者が日本語を習う時には、日本語敬語は基本的に相対的な面が強いということを念にいれた上で、まず in-group と out-group をよく区別・判断し、その次に尊敬語、謙譲語を正しく使い分けることを身につけなくてはならないだろう。

参考文献

1. 池田弥二郎、「日本語の常識大百科」、講談社、1982
2. 奥野信太郎、「式辭挨拶の事典」、集英社、1979。
3. 現代コミュニケーションセンター、「日本語のル

- ールブック』、ごま書房、1983。
4. 劍持武彦、「問の日本文化」、講談社、1982。
5. 辻村敏樹外、「敬語」、岩波書店、1977。
6. 林大、「図説日本語」、角川書店、1982。
7. 林巨樹、「日本の言の葉」、東京書籍、1979。
8. 林四郎、「世界の敬語」、明治書院、1974。
9. 文化庁、「待遇表現」、大蔵省印刷局、1982。
10. 南不二男、「日本語の敬語」、大修館書店、1981。
11. 宮地裕、「待遇表現」、『日本語と日本語教育』、国
立国語研究所、1982。
12. 国語学会、「国語学大辞典」、東京堂出版、1981。
13. 「岩波国語講座－日本語 4(敬語)」、岩波書店、
1977。
14. 金田一春彦編、「日本語の姿」、大修館書店、1981。